

## ～ 中国・香港日本人学校大埔校 ～

前香港日本人学校大埔校

現北見市立高栄中学校 葉菫清敏

### 1. はじめに



平成16年4月6日、赴任教員8名の家族と共に香港国際機場に降り立った。

到着ロビーを見渡すと、「歓迎！香港日本人学校」の横断幕が目飛び込み、現地の先生方による暖かい歓迎を受けた。沢山の荷物をカートに乗せ駐車場に向かうと、外気の「ムン」とした生暖かい湿気を全身に感じ、期待と不安で胸が高鳴ったのを今でも覚えている。

香港での3年間は、子ども達との素晴らしい体験と幾多の苦難を乗り越えてきたという達成感で一杯だ。異文化の中での仕事と暮らしは、私の人生にとって、本当に貴重な経験となった。

世界で最も繁栄する経済都市の一つであり、世界中から人々が集まる観光都市でもある香港は、西洋と東洋が混在する独特の街である。中国の一部でありながらも資本主義経済の象徴という一面も見せる。金融、貿易、摩天楼に代表され、100万ドルの夜景と謳われる「眠らない街香港」の姿を簡単に紹介したいと思う。

### 2. 香港～

香港島（*ホンコン*）などの島々と中国国境に隣接する九龍半島（*カウロン*）から成り立つ、約700万人の巨大都市である。アヘン戦争の敗戦から、南京条約（1842年）により香港島が、次いで北京条約（1860年）により九龍半島の先端が英国領土となる。1898年、英国は更に中国

との租借条約により235の島を含む新界の99カ年にわたる租借を確保。しかし、1982年9月以来行われてきた中英交渉が1984年9月妥結し、同年12月19日、中英双方の首相により、1997年7月1日をもって香港の全領域を中国に一括返還する旨の英中共同声明が署名され、1985年5月発効。1990年4月、中国全国人民代表大会にて「香港特別行政区基本法」を可決、成立。1997年7月1日、中国に返還された。

第二次大戦中の1941年から1945年の4年間は、日本の占領下に置かれ、当時の面影を残す建造物などを今も見ることができる。

日常では、至る所に日本製品が溢れており、親日的な雰囲気漂っている。しかし、日本の終戦記念日間近になると、「打倒日本軍国主義」といったデモ行進が一部で見られ、特集番組も放映されるため、反日ムードが高まる。この時期の邦人の外出には、多少留意が必要となる。

現在の在留邦人数は2万5千人を超えており、毎年約120万人の日本人が来港しているが、近年は中国大陸からの富裕層と見られる観光客が急増している。

香港の生活は、中国広東省の文化を継承しているが、建造物や交通網などイギリス様式も多く取り入れられ、貿易と金融産業を中心とした国際都市に相応しい規模を誇っている。

交通機関の主幹である鉄道のMTRとKCRは、最新の技術が導入されており、現在もなお路線が延長されている。また、2階建てバスで有名なトラムや、庶民の日常の足に欠かせないミニバスやタクシーは、昼夜絶え間なく走行している。

日本人にとっては非常に生活しやすい環境であり、治安も日本と殆ど変わらないといえる。

居住地域では、狭い土地に立ち並ぶ超高層マンション群（現地ではフラットと呼ぶ）や欧州製の高級車が頻繁に往来する傍ら、貧困層地域も残っており、光と陰を目にすることになる。*ホンコン*には太古城、*カウロン*には*ウガハル*といった日本人が多く住んでいる地域があり、

そごう、三越、ジャスコといった、日系の商業施設も数多く点在し人気を博している。

来港時は、香港ドル(\$ 1 = 14円)、人民元(1元 = 15円)だった通貨価値が、帰国時には、中国の台頭により逆転現象が起きたのは、衝撃であった。

香港の一般的な家庭は、夫婦共働きが多く、東南アジア系のお手伝いさん(アマさんと言う)を雇用して家事や育児を任せている。休日ともなると、休暇を過ごすアマさん達が公園や遊歩道などに集結し、束の間の一時を過ごしている。また、外食を好む香港人の食生活を、街市といった庶民的なマーケットや多彩なレストラン群が繁華街に軒を並べ、彼らの胃袋を支えている。

最近では、中国経済の急速な発展により人や物の流入が激しくなり、コピー商品や有害な食料品など社会的な問題となっている。在任中に

香港ディズニーランドが誕生したが、オープン当初から、順番を守らない中国人のマナーの問題など、文化の違いによるトラブルが起きていた。

香港の言語は、一般に広東語が中心であるが、母語教育(北京語教育)を導入している。また、英語教育が盛んに行われており、幼少期から流暢な英語で話す様子が多く見られる。

日本文化の流入(日本ブーム)が目立ち、食品(出前一丁など)、日本食レストラン(回転寿司など)、お菓子、電気製品、自動車などが街中に溢れている。さらに、日本のテレビ番組を定期的に放映していたり、日本語教育(日本語会話教室)も盛況である。また、北海道から沖縄までの日本ツアーも高い人気を誇っている。



### 3. 香港の教育環境



香港は小学校卒業時には、香港教育署の行う一斉学力試験: Basic Competency Assessmentを受け、その成績によって公立の中学校に振り分けられる。私立学校は、面接が重視され、その結果により入学が許可される。また、中学校(F5)が終了するときに香港中学教育會考: Hong Kong Certificate of Education examination (HKCEE)という統一試験を受け、合格すると中学校の教育課程を修了することができる。小学校(Primary School) 中学校(Secondary School) 5年(Form 1 ~ 5) 大学予科(High Level) 2年(Form 6 ~ 7) 大学3年である。小学校1年(P1)から中学校3年(F3)までは香港政府からの援助による9年間の無償教育を行っている。6・5(+2)・3制をとっている。この成績により、大学予科の希望校へ進学できるかできないかが決定する。その後、大学予科終了時には、最後の難関、高級會考試験: Hong Kong Advanced Level Examination (HKALE)を受ける。この結果により大学へと進学できるか否かが決定する。HKCEEおよびHKALEで優秀な成績を修めた生徒はかなりのエリートであり、海外の大学へと留学していく者も多いようである。

大埔校と交流のあった大埔記念学校をはじめ各学校段階では、未だ二部制(午前校・午後校)をとっている学校もあるが、それらを全日制の学校にする計画が香港政府から出され、2005年から実施されている。

また、近年では、早期教育(就学前教育)の重要性も唱えられてきており、香港政府による実態調査も行われている。

#### 4. 香港人の教育理念

香港と日本の教育制度の違いとして、試験制度と言語教育の2点があげられるだろう。試験制度の違いは香港の学生が非常にまじめに勉学に励んでいる側面に反映されているが、その反面「学校の授業時間に関する国際比較調査」結果からも分かるように、教育課程全般に学力偏重の流れをもたらしている。

また、言語教育の違いは、特に注目される点でもある。バイリンガル教育と呼ばれる、2カ国以上の言語教育は、香港では小学校低学年の頃から進んでいる状況である。実際、日本人学校の子ども達が、ローカル校の子ども達と交流をする際に、香港・日本の文化をお互いに教え合う企画を立てた。現地校の教師は、日々専門教科と英語を教えており、そのうち合わせには英語を介すことで意思疎通ができた。

各学年による本校との交流会でも、現地校の子どもへの説明は、英語を使って説明しても十分理解してくれたようである。日常的に中国語(広東語)と英語による教育が進んでいることを垣間見た場面であった。しかし、このような教育熱とはうらはらに、詰め込み主義やテスト主義、暗記主義を信奉する香港の教育の実態に、疑問が投げかけられているのも事実である。それは、一般的な能力として、与えられた課題を時間内にこなすことはできるが、自分で考えたり、工夫したりするのが不得意で、創造力、思考力、応用力がないと批判されていることに示されている。近年日本でも、創造力、思考力、応用力等の力をつけようと「自ら考え、自ら学び、自ら判断する子ども」の育成を目指し、新指導要領の下で様々な取り組みがされているが、香港でも今後、同じような取り組みがなされる可能性も少なくないと思われる。

また、香港での幼少期からのバイリンガル教育の弊害として、日常使われる生活言語の能力が低下し、それに伴って全般的な学力低下が深刻な問題となってきているのも事実である。日本でも幼少期からのバイリンガル教育の導入が叫ばれて久しいが、同じような問題を引き起こす可能性は十分考えられる。バランスを十分考えながら、子ども達に「確かな基礎学力」を身につけさせることが大切だと言えるだろう。

#### 5. 言語に対する考え方

小学校から選択する要素がいくつかある。宗教教育として仏教系とキリスト教会系。さらに、教育言語として、中国語系と英語系である。中国語系の学校では、教科書や授業は広東語や北京語が中心で、英語系の学校では、使用される教科書は英語、教師の話す言葉も英語が中心となっている。

現在香港政庁から出されている資料によれば、香港政庁が目指す言語教育の目標は「Biliterate (中国語と英語筆記者)」と同時に「Trilingual (英語、広東語、北京語)」である香港人の育成である。そのため、1966年からはStanding Committee on Language education and Research (SCOLAR) を設け、言語教育の充実を図っている。現在は、中国語(広東語)と英語の両言語を学校教育のコアカリキュラムに位置づけ、義務教育の9年間を通じて教育を行っている。1988/89年度から、普通語(北京語)も義務教育でのコア教科として位置づけられた。近年では、小学校では、25%~30%が普通話を含む中国語教育、17%~25%が英語教育となっている。

2002年からは、中国語と英語の新しいカリキュラムガイドに基づいた教育が行われている。それにより、子どもが学校で言語を学ぶ機会の充実が図られ、英語や普通話でのディベートやスピーチ、ドラマの大会が行われるなど、言語教育の発展が促進されている。現在は、「English in the Air」プロジェクトが推進され、子どもだけでなく、大人への英語学習も推進されている。

#### 6. 香港日本人学校大埔校



香港日本人学校には小学部と中学部があり、小学部は香港校・大埔校の2校舎に分かれている。九龍地区にある大埔校には、日本語学級と英語で授業を行う国際学級が設置されている。

大埔校は、香港日本人学校(現小学部香港校)の児童数の増加に伴い新たな学校が必要になったことから、1997年に開校し2006年に10周年を迎えた。

大埔校は、イングリッシュセクション(ES)を併設している日本人学校で、近年そのESとの交流が年を追って充実し、全校的な規模で行われるようになってきた。また、ティンカーピン校やメモリアルスクール校など香港の現地校との交流も定着し、年々充実してきている。

2004年度から、より効率的な学習効果を目指し導入された、15分をユニットとした組み合わせで授業を行うモジュール制によるカリキュラム、習熟度別に行われる英会話学習など特色ある教育活動を目指している。また、2005年度に新装になった、パソコンを活用した情報教育の推進も進めている。

2006年度は563名の児童が在籍しており、殆どの児童が、スクールバスを利用している。各バスごとにバスマザーと呼ばれるバススタッフが同乗して通学時の安全に務めている。

昼食は、弁当を持参しているが、日系の仕出し弁当屋を利用している職員も多い。

教員は、日本からの派遣教員22名と現地採用教員(財団派遣教員、養護教員、英会話教員、イメージ教員、水泳スタッフ)の総勢40名からなり、さらに事務職員や清掃スタッフなどの学校職員の構成で通常勤務が行われている。

職員イベントとしては、各学校持ち回りで、3校交流会というスポーツイベントが開催されたり、現地主催のドラゴンボートレース、100kmトレイル、香港マラソンなどへ意欲的に参加している。



教職員や家族の間では、退勤後や休日に習い事(中国語会話、英会話、二胡、風水、太極拳、カンフー、中国茶など)に通ったり、地域スポーツ(サッカー、バスケットボール、ラグビー、バレーボール、ソフトボール、アイスホッケー、ゴルフなど)があり、日本人倶楽部主催のイベントもある)で交流を広げたり、趣味に興じたりしていた。

## 7. 現地での実践から



中学校の経験しかない教員が、現地に派遣されてから、小学校の教壇に立つという例は珍しくない。私は、十数年来体育の指導しか携わったことがなく、小学校への赴任が決まった時は、戸惑い、悩んだ。実際に現地に派遣され、学校生活がスタートするやいなや、児童への指導が理解されず、多くの保護者からバッシングを受け、精神的に重圧を感じる日々が続いた。こうした軋轢を取り除くには、信頼関係を築く以外道はなく、在任中の3年間で、児童や保護者を感動させる取り組みを実践することにした。

私の経験から子供達に伝えることの出来る手段の一つが運動会で行われる組体操であった。

前任校のある北海道では、組体操が、安全面の点から軒並み廃止され、実施している学校がかなり少なくなっていた。しかし、私は学生時に味わった、組体操の感動を子供達にも伝え、人生の1ページに刻んで欲しいと思っていた。

同期で赴任してきた教員の中には、体育を指導してきた経験者が多く、やる気に満ち溢れており、協力体制も申し分なかった。

そこで赴任初年度の運動会では、香港の名所をテーマにした「DISCOVERY HONGKONG」

を計画し、披露した。不思議とこの頃から保護者からのクレームがなくなっていた。

次年度は、4年生を担当していたため、社会科の単元を取り入れ、傘を使ったマ스ゲーム「WATER FEIARY ~水はどこから」を学年の先生方と考案した。演技が終わった瞬間、鳥肌が立ち、振り返ると沢山の観客が涙を流して拍手をしていた。

気合いの入った最後の運動会は、5段タワーや7段ピラミッドという大技と最後に人文字を取り入れるスケールの大きい組体操を提案した。危険を理由に反対した先生もいたが、最終的に挑戦することが決まった。

学校の校庭が人工芝で小さく、ましてや香港特有の灼熱の太陽の下での練習は、本当に大変であった。「がまん！」が子供同士が分かち合った練習中の合い言葉となった。こうして、5、6年生の総勢200名による「美しい国、日本」をテーマとした組体操「EXOTIC JAPAN」が完成した。



何よりうれしかったのは、練習期間を通して、怪我人が一人も出なかったことと、不登校気味の児童も含め、休んだ児童が一人もいなかったことだった。そして、協力してくれた先生方の尽力に感謝の気持ちで一杯だった。

日本の子供が忘れかけている「耐えること」「我慢すること」が、香港で暮らす子供たちの心に伝わったのではないだろうか。子供たちの満足気な姿を見た時「喜びと感動」を分かち合えた気がした。

6年生の卒業文集の大半がこの組体操を題材にしていたのは、この取り組みが子供たちの心に深く刻まれた証であろう。

## 8. おわりに



最後になるが、便利で生活しやすい香港は、過ごしやすく、目に飛び込んでくるあらゆる物が刺激的であり、魅力的であった。

また、70階建てマンションの57階に居を構え、雪の北海道とは、かけ離れた気候と環境の中での生活は、日本では絶対に味わうことのできない体験であった。

しかし、我々は、教員として派遣されている以上、常に職務上の責任を抱えており、時にはストレスや過労となって体に表れ、現地の病院に幾度かお世話になることもあった。派遣された教員の中にはそういった苦勞を乗り越え、重責を果たされた方が多いと思う。ある意味大変な仕事であった。

今こうして振り返ると、沢山の思い出が脳裏をよぎり、感慨深いものがある。香港での経験は、これからの教員生活の糧となることは間違いないであろうし、こうしたチャンスがまたあれば、再び挑戦してみたいと思う。